

時の贈り物 [第101回 蛭子山1号墳と作山1号墳の「動物形土製品」の謎]

与 謝野町古墳公園の蛭子山1号墳は、日本

古代史学会において日本海沿岸地域を代表する大型古墳として有名なものです。この蛭子山古墳群は南隣りの作山古墳群と1セットとなっており、今から1650年ほど前の丹後加悦谷の大首長とその一族の奥津城（＝墓域）として国指定史跡となつています。

古墳はお墓ですので、葬送（そうそう）儀礼（＝お葬式の儀式）が行われたと想定されています。古墳そのものが儀礼の舞台なのですが、実際の儀礼の跡は、食べ物などは腐つて残っていないため不明ですが、土や石の作り物として発見される場合が多いのです。そのひとつに、丹後の古い古墳で顕著に見られるものとして「食物形土製品」「動物形土製品」が挙げられます。その

中でも動物形土製品の出土事例は国内でも数少なく、古代丹後独特のものです。

前方後円墳である蛭子山1号墳の後円



犬・猪・鶏の土製品

部の墳頂平坦面（＝古墳のテッペン）からは、豪族が埋葬された石の棺（ひつぎ）から「猪と犬」の形をした土製品が複数出土しました。これらは、わざと割られた状態で出土しており、また、小型品であり、埴輪（はにわ）とは明らかに性質が異なります。

実は、この猪と犬の土製品がどういう意味を持つて儀礼で使われたのか「謎」なのです。国内の出土事例が少ないということも原因の一つではあるのですが、簡単に解けそうて解けていないのです。仮説をいくつか示しますと、①狩りの場面を表す、②食肉の捧げもの、③多産の祈りなどが想像されます。モノだけからの謎解きはなかなか難しいものです。

（与謝野町教育委員会）

古

代史ファンが我が国の国家形成の謎

を体感するためにしばしば訪れる場所が、与謝野町立古墳公園です。古墳公園の主役は墳長14.5mの蛭子山1号墳で、今から約1650年前に造られ、日本海沿岸地域第3番目の規模を誇る大型前方後円墳です。古墳には「原丹後王」の一人がていねいに葬られていました。当時の文字資料が伝わっていないため、残念ながら、王の名前はわかっていません。

その原丹後「王の棺」が、蛭子山1号墳の墳頂部に安置されている舟形石棺です。花こう岩（俗にいう御影石）をえぐり貫いて作ら

れており、棺

の蓋が2m、

身が3mもある

と言われる

重厚大型の石

棺です。花こ

う岩はたいへ

ん硬質な石材

であるため、

上／古墳公園に安置されている石棺
下／昭和4年当時に発掘された石棺の様子



術では細工が難しくあまり使われない石材なのですが、加悦谷では蛭子山1号墳の舟形石棺をはじめとして、古墳公園の作山1号墳などいくつかの花こう岩製の石棺が知られています。当時の最先端の加工技術を持った集団が加悦谷に存在したことがうかがえます。

丹後地域で大型古墳が築造された時代は、我が国が国家の体裁を整えた飛鳥時代の約200〜250年前に相当します。日本国以前には、列島の各地で独自の地域王権が地域を統べていました。「原丹後王」は地域王権の雄として大いに活躍していたことでしょう。

(与謝野町教育委員会)

時の贈り物 [第103回 丹後の食文化「丹後ばらずし」]



丹後ばらずし(南部型/与謝野町型)

ばらずしは、お祭りやお祝い事など「ハレの日」の一品として、生活文化の中に根付いています。地元では単に「ばらずし」と言っていますが、ばらずしは丹後以外にもあり、各々の地域で特徴があるようです。

丹後の「ばらずし」の最大の特徴で、かつ定義付ける要素は、茶色の「サバ」のソボロ(正確にはオボロ)を使っていることです。そのほかにも、酢飯の砂糖の使用量が多めで、「甘みが強い」ことも特徴です。丹後以外の人が初めて「丹後ばらずし」を食べる時には、まず視覚的に茶色のソボロに驚き、次に味覚として酢飯の甘さに驚きます。



「丹後ばらずし」の分布域略図

また、丹後の北部と南部の「ばらずし」は、味覚的には同じですが、作り方に違いがあります。北部では長方形のマツブタに酢飯を敷き詰めて、軽く押して木べらで方形に切り分けて盛り付けします。南部では丸いすし桶で作ったものをシャモジでお皿に盛り付けるので、ちらしずし風の盛り付けとなります。

ちなみに、「ばらずし」という名前は、西日本の古い方言で「ちらしずし」のことです。この名前の由来は寿司の歴史から説明できるのですが、またの機会といたします。

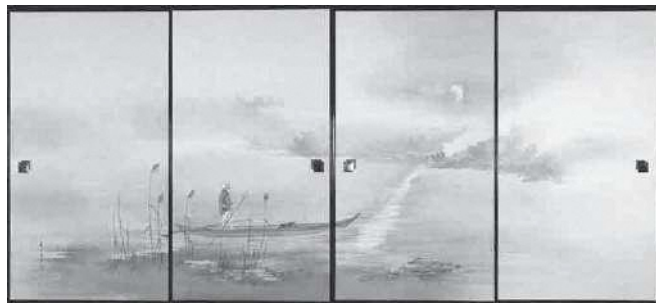
(与謝野町教育委員会)

日

本遺産「三〇〇年

を紡ぐ絹が織り成す丹後ちりめん回廊」構成文化財である旧尾藤家住宅に残されていた襖絵の中から、明治時代の京都画壇で活躍した画家、草野龍雲（うん）（1864年～没年未詳）が描いた大作「月夜漁舟図」を紹介します。

一日の漁を終えた漁夫が舟を滑らせて家路に向かうなか、水面を舟の傍まで伸びて揺らめく光が目に入



月夜漁舟図

り、空に上がったばかりの中秋の名月に気づいて舟の上にもかかわらず棒立ちになってしまふさまを描いています。手前の芒や漁夫は細やかな線で足元の魚簗に至るまで緻密に描き、遠い向こう岸の屋形船や雨雲、月などは淡い墨でぼかして描いています。遠近双方の異なる描写を川面に映り込んで斜めに伸びる月の光が見事に繋いでおり、奥行きのある空間となつています。

本作のほかにも、旧尾藤家住宅には草野龍雲の襖絵は数多く残っており、当時の当主、すなわち十代尾藤庄蔵が龍雲と面識を持ち、直接発注して描かせたことをうかがわれます。

（与謝野町教育委員会）

INFORMATION

草野龍雲筆「月夜漁舟図」
紙本墨画淡彩 襖四面を
江山文庫にて展示中です。
ぜひご覧ください。

時の贈り物 [第105回 大江山連峰の根本寺伝説]

大

江山連峰の南の峰を「赤石ヶ岳^{あかいしがだけ}」と言います。標高736m。

加悦谷から遠望すると鈍角に尖った山頂が特徴的です。

根本寺伝説は複数ありますが、その一つは、「赤石ヶ岳の中腹に、かつて根本寺というお寺の大伽藍^{だいがらん}があった。大火災が起きて、僧は

本尊の地藏菩薩を救うこともできなかった。仕方がないので、地藏菩薩は自分自身で赤牛にまたがり、三度空に舞って与謝の金剛寺に飛来した」(金剛寺縁起)というものです。

大江山連峰の大部分は「カンラン岩」という黒っぽい岩石です。カンラン岩は風化すると表面が薄茶色になります。石の色分けでは「赤っぽい」石となり、これが赤石ヶ岳の名称由来と考えられます。

実は、大江山連峰のカンラン岩体は地滑りが発生しやすいのです。根本寺跡伝承地の平たい地形

も地滑りによってできたものです。となると、「赤牛が山の斜面を飛び跳ねながら降りる」という伝承は、「山崩れで赤石がゴロゴロと落ちる」という大雨災害が物語化したと想像することができます。どうやら、この根本寺伝説はただのファンタジー作品ではないようです。

(与謝野町教育委員会)

根本寺跡伝承地



大江山連峰赤石ヶ岳

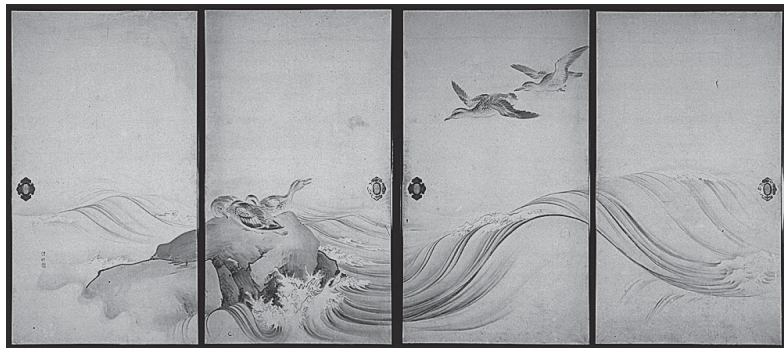


本遺産「三〇〇年
を紡ぐ絹が織り成

す丹後ちりめん回廊」構成
文化財である旧尾藤家住宅
に残されていた襖絵の中
から、幕末の京都画壇の
四条派の画家、横山清暉
(1793年～1864年)
が描いた「波濤に水禽図」
を紹介します。

四面の襖全面に荒波が大
きくうねり、岩に打ちつけ
ています。岩の上には
鴨が羽を休めてお
り、うち一羽は飛び
来る仲間を呼ぶかの
ように空に向かって
鳴いています。

荒海と鴨という冬
らしい画題を、なめ
らかな描線とダイナ
ミックな構図で描い
ています。襖四面の
下半分に大きなカー
ブを描いて盛り上が
る波の横S字を配
し、上半分は四条派
の特徴である余白が
大分を占めています。
岩の上で呼ぶ鴨
と飛び来る鴨を結ぶ



横山清暉筆「波濤に水禽図」紙本淡彩 襖四面（与謝野町指定文化財）

斜めの直線が絶妙なアクセ
ントとなり、また上下で異
なる描写を見事に繋いでも
います。

尾藤家でこの襖絵は、煎
茶趣味で作られた新座敷
(洋館下の座敷)の客用襖
でありました。

当主の高い趣味性と、冬
のおもてなしの心がうかが
えます。

(与謝野町教育委員会)

俳句

かれのほらしだいのぼ おおえやま
枯野原次第上りに大江山

洗心

江山文庫に短冊が残るこの俳句は、地元与謝野町の

俳人で郷土史家の小室洗心こむろせんしん

(1877～1970年 本名万吉) が詠んだものです。

天橋立をはじめ郷土の名勝を題材にした句を数多く残した洗心らしく、この句には土地に根差した大江山の様子が実によく描かれています。

— 眼前の枯野原は奥がいつのまにか斜面となり、斜面はそのまま大江山連峰の枯木の山肌へ、そしてなだらかな稜線へと続いている—

皆さまの中で町外の方から「大江山はどの山ですか?」と尋ねられた経験のある方は、結構いらつしやるのではないのでしょうか。

鬼伝説の影響もあり、単独峰と思われがちな大江山ですが、最高峰の千丈ヶ嶽を中心に鳩ヶ峰、鍋塚、赤石ヶ岳といった山々が尾根筋をなす連山の総称です。

洗心の句は、春、夏、秋にはさまざまな姿で土地の人の目を楽ませてきた大江山が、枯れた地肌を晒す冬にはその緩傾斜のゆえに眼前の田畑とひとつながりになる様子を巧みに切り取っています。

(与謝野町教育委員会)



小室洗心直筆短冊「枯野原次第上りに大江山」
江山文庫館蔵資料

時の贈り物 [第108回 襖絵でめぐる京の旅～日本遺産関連文化財～]

日

本遺産「三〇〇年
を紡ぐ絹が織り成

す丹後ちりめん回廊」構成
文化財である旧尾藤家住宅
に残されていたさまざま
な襖絵の中から、幕末の

京都画壇の四条派の画家、
長谷川玉峰（1822～

1879）が描いた「四季
京名所図」を紹介します。

天袋と呼ばれる、床の間

脇の袋戸棚にはまる小さな
襖の四面に、洛外の名所を
四季の移ろいと共に描いて
います。向かって右から順

番に、春の北山金閣寺、夏
の嵐山渡月橋、秋雨にけぶ
る紅葉の修学院離宮千歳
橋、そしてつい先日修復を
終え公開された清水の舞
台が、屋根を真っ白に覆う
深い雪の中に置かれていま
す。

尾藤家でこの天袋襖は、
通りに面した一番の賓客を
もてなす主座敷の客用襖で
ありました。時には京都市
内から来た客を出迎え、当
主とのよき話題の種になっ
ていたのではないでしょ
うか。

襖絵というと、大きなも

のをイメージしがちです
が、小さな天袋襖の中に四
季を凝縮した世界が展開し
ています。襖絵でめぐる京
の旅、いかがですか。

（与謝野町教育委員会）



長谷川玉峰筆「四季京名所図」絹本淡彩 襖四面（与謝野町指定文化財）

時の贈り物 [第109回 与謝野町の地名1「地名こと始め」]

皆さんの身の回りのあ

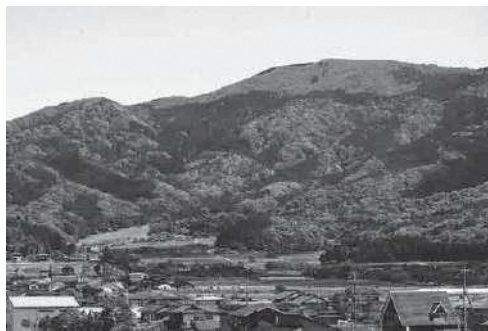
らゆるモノに呼び名（名称・名前）がついています。なぜ、名称があるのでしょうか？ 名称は人がつけるものですが、主な目的はほかと区別し、ほかの人たちとそのことを共有するためだと思います。土地にも名称があり、「地名」と言っています。地名もさまざまなものがあり、かつては田んぼ一枚ごとに名称がつけられていた時代もありました。細かすぎる地名は近代以降に整理統合されて今に至っています。が、「字（あざ）」地名は長い時代を越えて今に伝わっているものが多いようです。

また、地名は地域の歴史情報の一つだと言われます。地名をヒントにした創作、文学は別としても、歴史学の資料として扱うには注意が必要です。その理由は、いつの時代につけら

れたのか不明な地名が多く、その呼び名が変化している場合があるからです。

一例を挙げると、あざめい字名「温江・あつえ」に関する資料は奈良時代の平城京から出土した木札に見られ、1300年ほど前の地名であることがわかります。この木札での漢字表記は「謁齋」で、読み方は「アチエ」です。地名の由来・意味がわからなくなり、近い発音の文字があてられた結果、「温江・アツエ」に変化した地名です。

（与謝野町教育委員会）



字「温江」（加悦庁舎から撮影）

時の贈り物 [第110回 ふるさとを遠く～晶子さんの旅の歌～]

開催中の江山文庫企画展「旅する書画～江山文庫館蔵コレクションより～」の展示品の中から、当町ゆかりの歌人、与謝野晶子さんの直筆短歌掛軸を紹介します。

ふるさとを

遠く思ひてわづらへる

灯の並びたる星が浦かな

晶子

昭和3年5月、晶子さ

んが夫の鉄幹さんとともに南満州鉄道本社の招待で中国北東部からモンゴル方面を旅行した際に詠んだ歌です。「星が浦」とは大連市郊外の海水浴場で、南満州鉄道が公園として整備しました。

かつて沖に大きな隕石が落ちたとの言い伝えから、このような名付けが

されています。

夜になつてもにぎやかな一大海水浴場の星が浦、海岸線に煌々と並ぶ灯りを見ていると、海に向こうの遠い日本を思い出して心が痛む、とうたっています。

晶子さんの胸に去来したものは、東京の家に残してきたたくさんの子どもたちと過ごした、なんでもない日常の風景だったのかもしれない。

一方、この旅の2年後に丹後を訪れた彼女は、眼前に広がる大江山から中国の旅に思いをはせた歌を詠んだりもしています。

前掲の異国の旅の歌は晶子さん特有の細く流麗な筆文字とともに、江山文庫で9月6日までご覧いただけます。

(与謝野町教育委員会)



与謝野晶子短歌掛軸「ふるさとを」(紙本墨書／江山文庫館蔵品)